

中英語文学の現実と空想/想像の世界における五感表現

—London, British Library, MS Harley 913 に収録されている

‘The Land of Cokaygne’と‘Sarmun’の場合

和田葉子

14 世紀にアイルランドで筆写された London, British Library, MS Harley 913 に収録されているふたつの作品、‘Sarmun’ (=‘Sermon’) と ‘The Land of Cokaygne’ は五感に関わる表現を使用する方法において対照的である。前者は五感に関係する表現を用いることによって、神の教えに従った正しい生き方をし、天国に行けるよう、聴衆を導く説教であるのに対して、後者は、すべてが満ち足りた理想郷に住む修道士たちの墮落した暮らしを描いた、五感の快楽大全とも呼べるファブリオの諷刺詩である。本発表では、五感に関わる表現がこれら 2 つの作品において、具体的にどのように使われているのかを考察した。

‘Sarmun’ (「説教」) には、聴衆の五感に訴えかける多くの表現が使われており、それらは托鉢修道士による説教の目的を果たすために非常に効果的に使用されている。13 行目に ‘So seip Seint Bernard in his boke’ とあるように、この作品は、当時、聖ベルナルドが書いたと考えられ、多くの聖職者たちに読まれていた *Meditationes piissimae de cognitione humanae conditionis* (Most pious meditations on the knowledge of the human condition) に見られる思想と言い回しをうまく利用し、説教の現実的な目的を達成しようとしている。*Meditationes* は、大罪の一つである傲慢を戒めるために、見たくも聴きたくもないような現実、例えば、死体や、それを食う蛆虫、自分の体から出てくる汚いもの等を思い起こさせて、いかに自分が取るに足らない存在であるかを教えているが、「説教」では、それらがより具体的に、しかも、繰り返し記述され、説教師は聴衆にそれらを直視するよう強く求める。視覚だけではなく、嗅覚や触覚にも不快感を催させるような表現が続くので、聞き手はまるでそこに汚らわしいものがあるかのように、鮮明なイメージを思い浮かべざるを得なくなる。

傲慢の次に、説教師は強欲について語り始めるが、興味深いことに、ここでは、五感に訴える表現は急に姿を消し、一人称を用いて、説教師自身の言葉で富の虚しさを説き、富は持っている間に役立つように使え、と教える。しかし、再び、五感、特に視覚と聴覚に訴える表現を頻繁に用いて、けちん坊は、強欲の罪で、最後の審判の日どんな酷い目に遭うか、脅しをかけるかのように、非常に恐ろしい情景と地獄の苦しみを描く。写本 Harley 913 にはフランシスコ会に関係する記録が収められているため、「説教」もフランシスコ会の聖職者が書いたと考えられる。フランシスコ会の修道士は、托鉢修道会の中でも、特に貧しかったと言われている。それを考えあわせると、強欲を捨てよ、と説いている箇所では、spend という語を頻繁に使っているのは、説教が終わった後、お布施を多く集めるために、聴衆の財布のひもを緩めるよう促しているように読めなくもない。フランシスコ会の修道士の非常に実用的な説教になっている。

最後に、「説教」は、傲慢と強欲を捨てた人々が天国で得られる永遠に続く至福について語る。ここでは視覚と味覚の表現が多用されている。天国に来た者は、甘き慰めを見 (Pe swete solas forto se (l. 198))、その魂は太陽の 7 倍も明るく輝き (Seue sipis briztir pan pe sun (l. 199))、死後、腐敗するはずの肉体までもが美しく強くなる。食べ物や飲み物に何の不足もない (To met no drink ther nis no need (l. 205))、なぜなら、神を見ることは食べ物を与えられること (Pe sigte of God him sal fede (l. 207)) なのだから、と言う。さらに、視覚と味覚のメタファーはより直接的になり、スタンザ 58 では「イエスを見ることは私たちの食べ物である」と述べる。次のように、このひとつのスタンザに sight が 3 度も繰り返されている。

Pe sigt of him is ure vode, (The sight of him is our food,)

Pe sigt of him is ure fest, (The sight of him is our respite,)

Al ure iois bep ful gode, (All our joys shall be very good,)

Pe sigt of him is alir best. (The sight of him is best of all.) (ll. 229-232)

神を見るとは、神の本質を直観的に見ることで、すなわち、神学で言うところの “beatific vision” (至福直観) を意味している。正しい行いをしてきた人は、死後、神を直接見ることが出来、完全に満たされた状態を永遠に得ることができる、と考えられていた。説教師は、誰にでもわかるように、その満ち足りた状態を、fede 食べ物を与えてもらい、お腹が満たされるたとえを使って教えている。ちなみに、上述の *Meditationes* にも天国での至福の状態が詳しく描写されているが、神を見ることは食べ物である、という表現は見られない。

「説教」の締め括りとなるスタンザ 59 にも、イエスは「処女の乳を吸い、私たちを自分の尊い血で贖っ

てくれた」(Pat soke þe milk of maidis brest/ þat boȝt us wiþ is der blode (ll. 234-235))と、味覚表現が使われている。母マリアがイエスに母乳を与え、今度は、イエスが、心の清い人間に「永遠に続く喜び」という食べ物を与えてくれる(ȝiue us þe ioi þat euer sal lest (l. 236))という、味覚の連鎖とも呼べる関係が感じられる。そして、その連鎖を続けて、今度は私たちが、困っている人たちに食べ物を与える、すなわち、自分の富を分け与えてやらなければならない、と教えているかのようである。

説教師は最後に、この説教を「聴きに」来ている聴衆全員に(Alle þat bep icommin here/ Fort to hire þis sarmun (ll. 237-238))7年分の免償が与えられた(seue ȝer ȝe habbiþ to pardoun (l. 240))と言う。説教を聴覚を使って「聞く」ことで、聴衆は免償を受けられたのである。五感が魂の救済を助けている。

同じ写本に収められている、もうひとつの作品‘The Land of Cokaygne’(「コケインの国」)はシトー会の修道士たちの当時の墮落ぶりを諷刺している。悪魔の誘惑が入り込む入り口であると考えられていた五感に対応する、目、耳、鼻、口、および触感を感じる体の部分は、常に厳しく見張っておかねばならないにもかかわらず、あらゆる誘惑に満ちたコケインの国に住む修道士たちの五つの入り口は全開である。

コケインの国の描写には、*Meditationes*に出てくる *beatific vision* を得た者が住む天国の描写のパロディではないかと思われる箇所(II. 20-44)が見られる。「コケインの国」と *Meditationes*の両方に、立て続けに否定辞を繰り返し、天国が現実の世界といかに異なるかを表現している記述があるのだが、「コケインの国」には、動物の糞や人の体に害を与える汚らしい虫、悪天候といった、*Meditationes*におけるよりも、五感に不快さを与える生活に密着したものが数多く挙げられ、コケインの国にはそれらが皆無だと述べている。

「コケイン」は古フランス語の「ケーキ/お菓子」に由来する語であり、この国にはあらゆるところに五感を喜ばせる豪華な食べ物や飲み物、光り輝く宝石や、高価な香料、薬があり、誰もがいつでも好きなだけ手に入れることが出来る。夜のないこの国には、そこら中に美しい花が咲き誇り、様々な鳥たちが一日中、楽しく鳴いているだけでなく、美味しく調理された鳥がその美味しそうな姿(視覚)や匂い(嗅覚)、とともに、「焼き立てだよ」と叫びながら(聴覚)、聴き手の味覚を刺激し、人々の口の中に自ずから飛び込む(触覚・味覚)という五感のすべてに訴えかける場面も描かれている。修道院は豪華な食べ物で出来ており、修道士たちは毎日、お腹いっぱい食べ、日課として、長い袖をたなびかせながら、鷹よりも速く空を飛んで遊びに出かける。しかし、なかなか帰って来ないので、大修道院長は、娘を一人連れて来て、その白いおしりを出してドラムのように(聴覚)叩くと(触覚)、修道士たちはすぐにそれを見つけて(視覚)降下し、皆でドラムを叩く。夏には近くにある女子修道院へ行き、川で裸になって水遊びしている修道女を見るや、捕まえて、連れ去り、楽しい時を過ごす。優れた種馬になりたい修道士は誰でも、一年に12人の妻を持つことが出来、中でも、最もよく眠り、最も休息をとったものには、すぐにでも父なる大修道院長になる望みがある、というのがコケインの国なのである。

詩人は、最後に、この国に行きたいなら、7年間、豚の糞の中に顎まで浸かって歩いて行く苦行をしなければならぬ、と言う。不謹慎な物語を楽しんでいた聴衆に、いきなり悪臭と耐え難い不快感が、嗅覚と視覚と触覚を通して襲う。彼らは、それがどんなものかよく知っていた。というのは、当時、通りには豚が歩き回っており、そこら中に落し物をしていたからである。罪深い聴衆の魂を、豚の糞まみれになる苦行によって、救済しようという作者のブラックジョークなのだろう。そして、詩人は、皮肉たっぷりに、こう呼びかける。徳の高い、高貴な殿方よ、この苦行をせずにこの世を去るなどという手があるだろうか。あわよくば、あの国を「見」て、戻って来なくてもよいのだから。興味深いことに、あの国に「行く」ではなく、*see*「見る」という視覚の表現で作品の最後を締めくくっている。

最初に考察した作品「説教」は、非常に不快なものに始まり、至福の天国の描写で終わっている。しかし「コケインの国」は、それとは逆に、すべての五感を満足させる天国のような描写で始まり、五感に最も不快な表現で締め括られている。面白いことに、現実的な「説教」における、人が目指すべき、神を見ることの出来る天国と、妄想のコケインの物語における、人が決して目指してはいけない国の、いずれにおいても、五感への刺激が重要な役割を果たしている。それは大罪を避けさせるための歯止めになる一方で、容易に大罪の引き金にもなる。「コケインの国」は、いたずらな作者が、*beatific vision*の *spiritual*な意味での至福の状態を、*caral*な意味で五感を満足させる至福の状態に置き換えたパロディだと考えられる。同じ写本に筆写された、これら二つの作品は、書かれた目的もジャンルも大きく異なっているにもかかわらず、両者はまったくばらばらの存在ではなく、「現実の世界」と「想像の世界」が、実像と鏡に映った虚像のように、対をなした関係にあるように思われる。